

平成26年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学校名	愛知県立南陽高等学校	氏名	林 雄一
-----	------------	----	------

1. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

私は、今年から「総合探求入門」という授業で国際理解教育について生徒に教える立場にいる。しかしながら、これまで途上国を訪れたこともなく、国際理解教育についてあまりにも無知であった。生徒に多くの学びを与える立場である自分が、インターネットや新聞等の人から伝え聞いた情報しか持たないのでは、あまりにも無責任であり、「このままでは自信を持って生徒に授業をすることができない。」「リアルな途上国の現状をこの目で見て感じたい。」と思い、この教師海外研修への参加を決意した。

「百聞は一見に如かず」である。途上国、貧困国と聞くと、どうしてもネガティブなイメージしかわかかなかったが、実際にラオスを訪れ、ラオスを体験してみると、何て平和で魅力的な国だろうと感じる。豊かな森林に囲まれた穏やかな生活。豊かさとは、物質的豊かさだけでははかれない物であることを知った。もちろん、ラオスが直面する課題点等も学び取ることができた。今後はこの経験を多くの生徒に伝え、自分自身も国際理解教育について学び続けていきたいと思っている。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

今思い返してみると、ラオスでは、毎日「サバイディー!」「コープチャイライライ!」を町でもホテルでも、行く先々で連発していた。それくらいのラオ語しか知らないという決定的な理由もあるのだが、それ以上に、こちらが言葉をかけるとにこやかに笑顔で挨拶を返してくれるラオスの人々がいたからだと思う。「日本にいる時は、こんな風に気持ちよく挨拶できていたかな。」と自分の日頃の態度を反省しつつ、日本人は、挨拶を歩きながらすませたり、相手をしっかり見ていなかったり、相手に正対して行うことが少なくなってきたのかなあと考えたりもした。毎日時間に追われながら生活している先進国ならではのことなのだろうか。ラオスでの生活を通してあらためて実感したことの一つだ。行く先々で、インタビューやアンケート、写真撮影にも笑顔で応じてくれたラオスの人々の優しさ、笑顔に癒され、ラオスがますます好きになった。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

日本とラオスの「つながり」という面では、日本がラオスに対して様々な支援活動を行っていることが挙げられる。初めてラオスの土を踏んだ時、ビエンチャンの空港に日本の国旗とラオスの国旗が並んで刻まれているのを目にした。現在の空港は日本の援助によって建てられたものらしい。そのほかにも、町中の様々な場所で日本の国旗を目にしたし、様々な場所で日本人の活躍を目の当たりにしてきた。日本のみならず、多くの国々の支援によってラオスが成り立っていることを知った。また、近年日本企業がラオスに進出するケースが増加しているという話も聞いた。中国、タイ、ベトナムの経済発展による賃金上昇に伴い、ラオスに工場を建てる

日本企業が増えているのだそうだ。今後、多くの日本人がラオスで、ラオス人が日本で働くような世の中になって行くのだろうか。そうなったら嬉しいと思う。ラオ語を学ぶ日本人も今後増加していくのかもしれないと感じた。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

環境問題は日本、ラオスが共に考えて行かねばならない問題である。私たち日本人は、日頃から「地球のために」とゴミ問題をとらえている。我々のせいで環境破壊が進んでいる事実を知っており、何とかしなければならぬと教育されているからだ。(ルールだから仕方なく分別しているという人も多いのではと思うが。) ラオスでは、「地球のために」という意識はあまり無さそうであった。ビニル袋や菓子袋が町中に散乱している場所も多くあった。しかしそれは、先進国から入ってきたもの(ペットボトルやビニルゴミ)の処理の仕方を知らないからであると思う。経済発展による利便性の追求が環境問題を引き起こしていく事実。ラオスのゴミ問題は、決して私たちと無関係ではないと感じた。ラオスにとって必要なのは、ゴミ問題について地道な啓発活動をしていくことと、ミミズコンポストや現地の最終処理場に見られたような、与えるだけの支援ではなく、コストがかからず現地の人たちが継続していけるような技術を支援することだと学んだ。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

ラオスでは、看護師の福嶋さんや環境教育の田口さん、バレーボールを指導している本間さん等、多くの青年海外協力隊のみなさんにお会いし、お話を聞く機会があった。彼女たちに共通していることは、生き生きとしていて、前向きで、今の仕事に全力で取り組んでいるということ。それから、職場の人や子供たちに受け入れられ、必要とされているということだ。言葉もろくに使えない状態でラオスでの生活をスタートさせ、並々ならぬ苦勞があったと推測されるが、彼女たちからはそんな空気はみじんも感じないパワーを感じた。このようなやる気にあふれた若者をサポートし、途上国に貢献しているJICAの事業は良い!と心から思った。また、草の根技術協力で『NPO法人ラオスの子ども』と活動している学校図書館支援については、さらに発展させてほしい。教科書が生徒全員に行き渡らない状態や、本を読む習慣がない状態が一刻も早く解消されると良いと思う。まずはラオス人の翻訳家がどんどん外国文学を翻訳し、本屋に置くことが重要なのではないかとと思う。ラオスの人々が文学に親しむようになって初めて、作家活動のみでも食べていけるような売れっ子ラオス人作家が誕生するのだろう。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

③ 不発弾除去に関する研修運営能力強化/UXO Lao

不発弾は地面に埋まっている危険物という意味では地雷と似たものであるが、その政治的背景や日本との関わり方の深さという面では、全くの別物であることを学び、不発弾をより身近な問題ととらえることができた。中でも、日本には地雷はほとんど埋まっていないが、不発弾は日本全国様々な場所で、今でも発見され続けているという話には驚いた。最も問題となっている沖縄では、戦争で投下された20万トンもの爆弾のうち1万

トン是不発弾であると言う。これまで約7000トンが除去されたが、全体の3分の1は未だ埋まったままであり、不発弾は確実に日本の住民の平和を脅かしている。また、戦時中に他国に対して行った日本軍の爆撃による不発弾の存在も、私たちが絶対に忘れてはならない問題だ。日本人として、不発弾は全く人ごとでは無い問題であることに気づかされた。何より、被害者の多くは罪のない子供たちであることが悲しく、やるせない。未来の子供たちのためにも、世界中から不発弾がなくなるようにしていかなければならないと思う。(林雄一)

⑦ 托鉢

朝5時に起床し、皆で托鉢体験に出発。托鉢は今回の研修で楽しみにしていたものの一つである。持参したあめ玉を手にワクワクしながら僧侶を待つ。途中、托鉢用にカオニャオ（もち米）を売る女性も見られた。僧侶は素足にオレンジ色の袈裟を着て、手には金属でできた器を持っている。器に入れるものに特に決まりはない。清潔で、心のこもったもの、新しいものであれば良く、食べ物が一般的であるとのこと。因みに、ラオスの僧侶は料理をせず、村人から食べ物をもらい、一日2食で生活するらしい。僧侶より低い姿勢から、器にふれないようにそっとあめ玉を入れていくと、不思議と神聖な気持ちになった。

僧侶たちの年齢は様々で、一列になって寺院周辺を歩き回る。若い僧侶の中には、学校に通うため、勉強するために出家する者が多いという話も聞いた。(住み込みで修業すれば、衣食住に困らないから。) どうりで小学生くらいの小さな僧侶も多い訳だ。小さな僧侶が並んで歩く様は何とも可愛らしかった。(林雄一)

⑧ ルアンプラバン教員養成短期大学（数学授業、研修中の先生たちとの交流など）

国は違えど、生徒に良い学びをという志を持った先生方に会い、お話しできる機会は貴重であった。教員養成短期大学とは、日本で言う教育大学のようなもので、今回の授業は、教員養成学校に通わずに教師になった方々のスキルアップのためのものだ。夏休み中にもかかわらず、多くの教師が勉強している姿にラオスの明るい未来を感じた。私たちが見学した数学の授業の両隣では、音楽と美術の授業が行われていて、どちらの教室も明るい雰囲気の中、楽しそうな授業であった。反面、問題点も感じられた。学校や教員が教育方針について決定することはあまり無く、国からのトップダウンでカリキュラムが決められているらしいということ。私は、生徒に「こういう大人になってほしい」という考えを、教師一人一人が持ちながら教育活動に当たることが望ましいと考えている。ラオスではそれが少しあいまいになっている印象を受けた。我々も日々研鑽を怠らず信念を持って教育に当たらなければと感じた。(林雄一)

⑩ ルアンプラバンの市場（LPPEに関連して訪問した市場、ナイトマーケットなど）

今回の研修では、朝市やナイトマーケットなどに出かけては、教材収集をする機会が多くあった。LPPEに関連して訪問した朝市では、JICAが住民に向けて配布したエコバッグを、実際に使用している姿を見ることができた。エコバッグのような地道な活動は、「ゴミをなるべく出さない」という意識を持つきっかけになり非常に良いと思った。朝市には、魚や肉、野菜、お菓子、衣料品等、あらゆる物が売られており、賑やかであった。魚や肉によい包装などは一切無く、その場で裁いて売っている様子。大量のハエがたかっていたりもするが、新鮮そうな物ばかりだった。

ナイトマーケットでは、おみやげの定番と言われるラオスTシャツを大量に買うなど、買い物男子の本領を發揮した私だったが、教材収集も積極的に行った。カオニャオを入れて蒸す竹の籠や、セパタクローのボール、紙すきで作られた絵はがきなどだ。ケーンと言われる竹製の民族楽器（かなり大きい）を購入したメンバーもいた。その他にも、民族衣装のシン（巻きスカート）の購入では、それぞれお気に入りの生地を選び、採寸し購入することができた。（林雄一）

⑫ JICAラオス事務所報告会

それぞれがこの研修で感じたこと、得たものを発表し合った。研修の仲間がこの10日間で感じたことは、当たり前だが全員違っていて、それでいて全員の意見が共感できるものであった。個性あふれるすばらしい仲間と共に旅をしてきたことを、改めて実感した。思えば、旅の間、バスの中や、夜の振り返りの時間など、毎日の話し合いが発見と共感の連続だった。皆が同じ目的を持って協力し、共感し合えたからこそ、一日一日の学びが何倍にもなり、さらに新たな疑問や問題意識を生み出したと思う。今まででは考えられなかったことが考えられるようになり、いろいろなものが見えてきた。今回一緒に旅をした仲間には本当に感謝している。また、JICA、NIEDのスタッフの皆様、その他私たちを支えてくださった皆様へ、この場を借りて感謝を申し上げたい。私はこの経験を多くの生徒に伝えて行くことで、日本とラオスの未来に貢献していきたいと思っている。（林雄一）

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [OME_1640]

◇キャプション： ウェイストピッカーの女の子

◇解説文：

ルアンプラバンの最終処分場で、ウェイストピッカーの子どもたちを見た。彼らは、決して恵まれているとはいえない自分たちの境遇を、どのように感じているのだろうか。



●写真2…ファイル名 [YBE_1598]

◇キャプション： ケオク子どもセンターで書道体験

◇解説文：

ケオクの子どもたちと一緒に書道。「天」と「月」を書いてみましたが、みんな器用に筆を扱い、美しい字を書いていました。カタカナで「ラオス」と書いてくれた子も。うまい！！



6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

風邪薬は必須。特に喉がやられますので喉の痛み、鼻に効く薬を持参すること。お粥やポカリの粉末はあった方が良いでしょう！栄養ドリンクも良い。

服は洗う・ホテルのランドリーに出す・現地調達するなどして、3日分で乗り切りました。

指さしラオ語本はなかなか便利で重宝しました。簡単な挨拶などは載っています。

雨期なので、折り畳み傘はいつも持ち歩くようにしましょう。

いつでもどこでもメモする。マナビノオトを肌身離さず持ち歩く。

7. その他全般を通じての感想・意見など

今回の研修は、JICA中部の酒井さん、NIED・国際理解教育センターの伴さん、共にラオスを訪れた研修メンバーに助けられながら、常に刺激を受けながら、何とか乗り切ることができました。JICAの研修だからこそ、これだけ深い学びが得られたと思います。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

以上